

コメント（田中）

## タブー視された防衛論議

軍事的な意味での防衛問題について、積極的にふれることは、不幸にもわが国では終戦以来、社会的にタブー視されてきた。『平和国家』あるいは『文化国家』と軍事問題は両立しないどころか、矛盾するといった短絡的な考えが支配的であったからだ。しかし、備えなくして、平和があり得ないことは国際的にみれば常識なのである。広い意味での安全保障の考えなしには、平和はあり得ないし、またあったとしても、それは短期間のものにすぎず、永続しない。したがって安全保障を抜きにしては、国の存在も、平和も語り得ない。大事なことは広義の安全保障の中で、狭義の安全保障、つまり軍事的防衛問題をどう位置づけるかである。大平さんは「軍事的な防衛問題は、これを過大視してもいけないし、また過小視してもいけない。どちらも間違いだ」と述べているが、同感である。

しかし、防衛についての過不足のない、バランスのとれた態度を、為政者だけでなく、国民一般が持つことは、口でいうほど容易なことではない。防衛問題はともすると、イデオロギー的興奮が付きまとい、思想的な影響もからんで、対立が尖鋭化しがちだからである。最近、起こった栗栖統幕議長の解任をめぐる世論の動向をみても、賛否両論の背景には、このようなイデオロギー的対立がひそんでいるようである。

だが、大平さんによると、国会における防衛問題の審議などをみると、最近では、従来のイデオロギーに偏重した論評がだいぶ変わり、もっと事実在即した即物的な研究や究明が行なわれるようになり、いまや、わが国の政治家も、冷静な態度で軍事問題に対処しつつあると強調している。事実とすれば、歓迎すべき現象といつてよい。

防衛問題が、わが国で建設的なコースにのらない一半の原因が、社会党、共産党など野党側の硬直した姿勢にあることは否定できない。日米安保条約反対の立場をとる野党側が、同条約を中心として樹立されている現在のわが国の防衛のあり方に批判的なのは、その政治姿勢からみて当然だが、そこから、一拳に無防備、中立を主張することは飛躍がありすぎる。

大平さんの防衛感覚は一言にしていえば、日本の安全保障は、あくまで、政治、経済、文化などの営みが秩序正しく行なわれることに依存し、これあってこそ、国民も自信を持つし、外国の評価も高まるのだから、広義の安全保障こそ、国の平和の基本だという認識である。こうした考えは、一部の極端な「タカ派」を除けば、いまでは、政治の世界でも共通の意見として定着しており、この意味では、大平さんの安全保障観には目新しいものはなく、政界の良識を代表するものといつてよい。

この防衛対談を通じ、私を感じたことは、大平さんの考えが、バランスがとれ、また発言も慎重であり、総じていえば、いわゆる「ハト派」的な姿勢や思考がよくにじみ出ている点である。

軍事の大切なことは認めながらも、それだけを取り外して、それだけで日本の安全保障を背負い込んでいるような、思い上がった態度は不可としながら、同時に、核兵器時代だから、少々の防衛など何の役にも立たないといった考え方も退けねばならないと、複眼的な見解を述べている点に、その特徴がよくうかがわれる。

栗栖問題については、「あまり論評したくない」と消極的であったが、内閣が栗栖

解任を決めた以上、やはり内閣の判断を尊重すべきだと述べている。そして栗栖発言が、その背後にある防衛庁の制服組の欲求不満を代弁したものであるか、という質問に対しては、「その点をよく聞きただしたが心配はないということだった」と答え、栗栖代弁説を否定する。

防衛問題を論ずる場合、当然ゆきつく先は、現行憲法との関係である。中曽根総務会長などは、かなりハッキリ、現行憲法改正論を打ち出しているが、大平さんはこの点については、「決定的なことをいう段階にはまだきていない」として、きわめて慎重である。「私は憲法についての国是を決めていくところまで、まだ機が熟していないと思う」と述べ、最後の決をとるには、もっと時間をかけねばなるまいとしている。ここでも性急な取り組みは危険という見解を暗々裡に示している。

## 私生児扱いは危険

最近の右寄り風潮が、日本に再び軍国主義を生むかという懸念について、大平さんは前にも触れた林房雄氏の史観を持ち出して、「民族の力が内に向かって収斂する時期には、比較的軍国主義とか、国粹主義的傾向に走りがちだが、それがある程度いくと、今度は逆に、外に向かってエネルギーが発散する周期があり、そうになると、非常に民主的になるのが、わが国だ」と分析し、日本人は行き過ぎることなく、平衡感覚のとれた、優れた国民だと強調している。軍国主義の危険は、よほど経済の運営を誤まらない限り、ないとの見解をとっている。

大平さんの時局判断は「今は、開放的な戦後民主主義や自由に馴れっこになってしまい、ややそれに対して、不安を国民は覚えてきたのではないか。若干、内に向かって収斂運動を起こしている時期だと思う。反省もあって、あわてているときじゃないか」というのだが、左にややゆれすぎた振り子が、正常の地点に戻りつつあるというのなら、心配は不要となろう。

私の防衛問題の質問に対し大平さんの解答は、口数が少なく、また重かった。けつして興にのり、喋りまわるといふことはなかつた。この分野はあまり得意でないという意識がそうさせたのであろうが、また、今の時点で、防衛論争をすることのむずかしさが、発言を慎重にさせた点もあつたと思う。現代の複雑な国家にあっては、昔と違い、安全保障の概念は一変したといつてよい。固有の安全保障、つまり軍事的意味での防衛力のウエイトは相対的に低下し、政治や経済、さらに科学、技術はもちろん、一億国民の道徳的信念や守るべき文化的価値の有無といったことが、国民の自国を守る意志の強弱を決定している。もはや安全保障は、ひと握りの軍部や職業軍人の仕事ではなく、いまでは一億国民すべての課題になつたのである。

しかし、それにもかかわらず、私は、これまでの日本では、敗戦の反動もあつてか、固有の軍事力が持つ、政治、外交、または国の安全保障に対する役割が不当に無視されてきたと思う。軍部や軍隊を不当に過大視することが危険なことはいつまでもない。しかしこれを国民的に認知しないで、いつまでも私生児扱いにしておくことも、これもまた危険なことである。栗栖統幕議長が解任された直接のキツカケは、万一の場合は

超法規的行動も必要という発言にあったが、この発言が、シビリヤン・コントロールの原則に照らし、不穏当であることは否定できないが、純粹に軍事的な観点に立つと、栗栖発言にも、もっともな点があるといってよい。大平さんが政権の座にいたとき、私には防衛問題の重みが、かつてなく強く感じられる時代がわが国にもくるように思えてならない。